カフェの騒がしい片隅で

頭をつくえに伏せて老人がすわっている。

連れはない。前に新聞紙。

老年のありきたりのあわれな姿。

老人は思う、強く賢く見目よかった時を、

楽しまずに過ごした歳月の多くを。

若かったのはほんの昨日。そんな気がする。

ずいぶん歳をとった。知っている。

わかる。

感じもある。

時は過ぎた、速く、実に速く。

「分別」が自分を愚弄した。老人は思う、

バカだった。いつも信じたあのごまかし。

「明日にしよう。時間はまだたっぷり」。

思い出す。衝動に口輪をはめた。喜びを犠牲にした。

失ったせっかくの機会がかわるがわる現れて

今あざわらう、老人の意味なかった分別を。

さて考えすぎた。思い出しすぎた。

頭がくらくらする。ねてしまう老人、

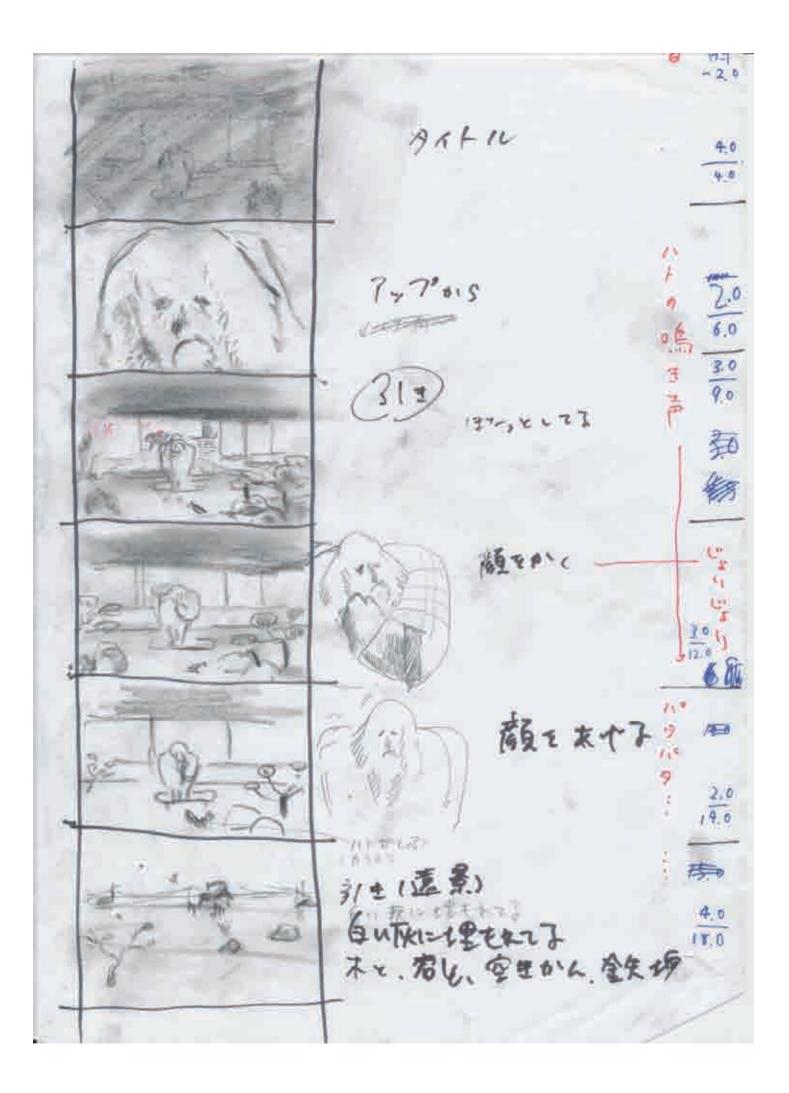
頭をカフェのテーブルにやすめて。

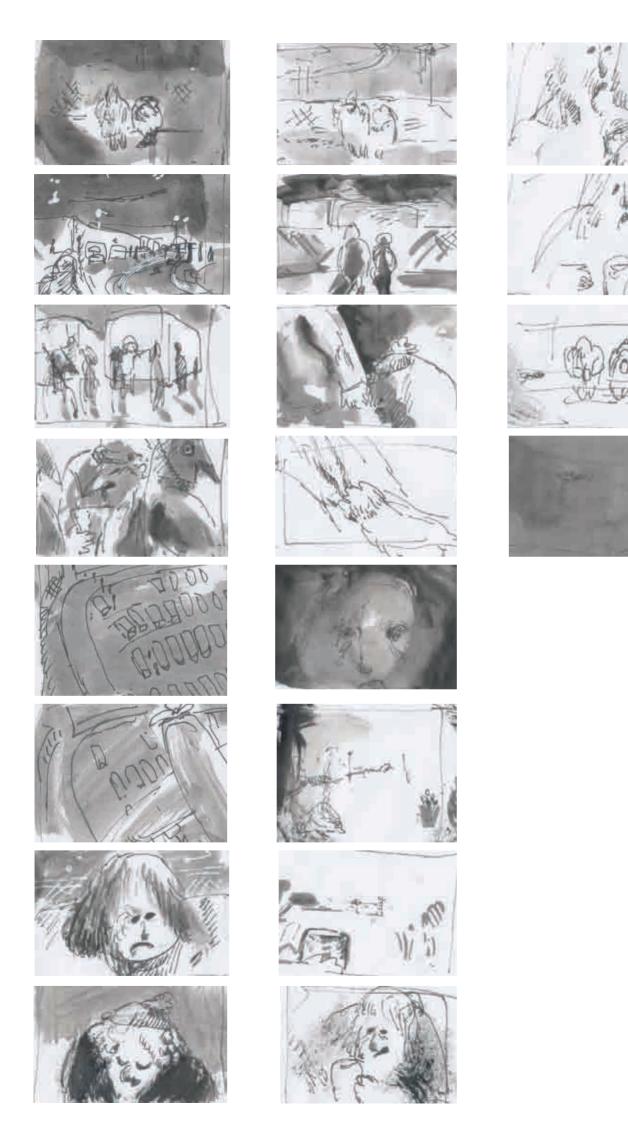












UK





















